

## 論文の要旨

論文題目 山田洋次の映画に見る 1960～1990 年代の日本社会  
— 『男はつらいよ』の映像分析を中心として—  
氏名 王 欽

本研究は、日本を代表する映画監督である山田洋次の映画作品『男はつらいよ』シリーズ全 48 作品を研究対象として、綿密な資料調査や作品内容に即したコンテンツ分析といった実証的研究方法により、映画が映し出す 1960～1990 年代の日本社会の実態を全面的に考察していく。

日本映画史上最長の約 30 年間にも及ぶロングラン映画の全作品群を、映像分析法や映像社会学の手法を用い、映画作品にとどまらず、山田の書簡、体験談、自叙伝等の膨大な資料を基に実証的に分析し、日本人論・日本社会論を再構築する基盤作りを試みる。

本研究は 2 部構成からなっている。第 I 部では、作家論や作品論にも踏み込んで考察し、山田洋次と『男はつらいよ』の世界を概観している。特に、山田洋次の自分史に遡って、山田映画の原点や、その映画作りと自身の原体験との影響関係を解明する。第 II 部では、『男はつらいよ』シリーズにおける三つの要素「望郷」「恋」「旅」を考察することで、映画が映し出す 1960～1990 年代の日本社会の特質や変容を探り、山田洋次は「寅さん」映画を通じて何を訴えたかったのかを明らかにする。

以上の研究課題を具体的に考察した結果、第一に、山田映画には「引揚者」というルーツによる作家性が存在し、引き揚げ体験や戦争体験は山田の芸術観の根底を支えるものとして、映画作品に大きく影響していることを解明している。さらに、山田映画の主人公は常に漂泊者であり、非市民であり、アウトローであるように、漂泊者の側から定住者を見るという映画の作り方は、外地育ちの作者自らの人生経験がベースになっていると考える。

第二に、『男はつらいよ』の作品要素を 3 区分（望郷・恋・旅）に分類し、それぞれ分析した結果、本映画は日本の家族構造、社会階層、ジェンダーといった社会的要素を内包しているため、地方と都市の対比、伝統と現代性の衝突といった具体的内容を通して、高度経済成長期の日本社会の変容を物語っていると結論づけている。